

【短報】御蔵島および三宅島におけるシラホシカミキリ属の後食植物の追加知見

伊豆諸島御蔵島におけるシラホシカミキリ属 *Glenea* Newman の2種、シラホシカミキリ伊豆諸島中南部亜種 *G. relict a izuinsulana* Fujita とリュウキュウルリボシカミキリ伊豆諸島亜種 *G. chlorospila hachijonis* Matsumura et Matsushita の後食対象植物については、高桑ほか (2011) の報告があるが、その後の筆者の観察によって新たな後食対象植物としてハクサンボク (スイカズラ科ガマズミ属) が確認されたので報告しておく。また、三宅島においても同様な観察を行ったので、その結果についても書き留めておくことにする。

調査に同行してくださった (有) むし社の藤田宏氏、ならびにいろいろと便宜を図っていただいた御蔵島観光協会的小木万布氏に感謝申し上げる。

(1) 御蔵島

2011年4月19日に黒崎高尾～稲根神社の昆虫相調査を行った際、暗い樹林下に生育するハクサンボク低木から、前年のものと思われるシラホシカミキリ属の後食痕を見出した (図1)。一方、高桑ほか (2011) の記録は主に都道沿いなどオープンな環境を調べた結果なので、樹林内におけるシラホシカミキリ属の後食対象植物を調べようと思い立ち、2011年8月5～6日に黒崎高尾付近の小径沿いで調査した。ここはスダジイが優占するがカクレミノとタブノキも多く、また一部にはクロバイやバリバリノキも高被度で生育する自然植生の林分で、小径沿いは大部分で樹陰に覆われている。後食痕はやはりタマアジサイにもっとも多く、ほとんどすべての株に認められた。次いでハクサンボクに多く、大半の個体に認められた。この2種を除くと頻度・密度ともに多少とも少ないが、オムラサキシキブとハチジョウイチゴに後食痕が認められ、1本のオオシマザクラからは明らかな後食痕が見つかった (図2)*。オオシマザクラはこの樹林内では少なく、ほかの樹にはわずかに痕跡的な食痕を見出したにすぎない。同じく痕跡的な食痕はハチジョウイボタ (モクセイ科イボタ属) にも認められたが、これが確かにシラホシカミキリ属によるかどうかは将来の調査に待ちたい。高桑ほか (2011) で報告したブドウ科植物とラセイタソウも少数の生育を認めたが、見た限りでは後



図1. ハクサンボクの後食痕 (裏面)。



図2. オオシマザクラに見られた後食痕 (裏面)。



図3. カラムシに見られた後食痕 (裏面)。

食痕は確認できなかった。また、タマアジサイと同属のガクアジサイは多数が生育していたが、ここでも後食痕はまったく見出せなかった。時期的にはシラホシカミキリ属は2種とも活動末期にあるようで、成虫はともに2,3頭の確認にとどまった。

(2) 三宅島

2011年8月7～8日に大路池を調査した。結果は高桑ほか (2011) で報告した内容とほぼ同様であったが、今回は樹林内の道路沿いのカラムシか

* このオオシマザクラはよく日の当たる斜面に生育しており、後食痕も十分に日差しを浴びる枝から確認された。また、リングカミキリ属は御蔵島から記録されていないが、もし分布しているとなると本属の種の後食痕である可能性を排除できない。

ら確実な後食痕を確認した(図3)。また、ブドウ科植物には注意したつもりだが、本属のものと思われる後食痕はツタに残されたわずかなもの以外には、まったく見つからなかった。なお、ここでは成虫は1頭も発見できなかった。

本調査は、自然公園法に基づく動物捕獲許可および御蔵島村条例による許可を得て行った。なお、三宅島については村条例による採集規制は無いが、観光地の大路池周辺は国立公園特別保護地区に含まれているので、採集に訪れる時は留意されたい。

引用文献

高桑正敏・岸本年郎・岸田泰則・須田真一, 2011. 御蔵島におけるシラホシカミキリ属2種の後食植物. さやばねニューシリーズ, (1): 18-21.

(高桑正敏 250-0031 小田原市入生田499
神奈川県立生命の星・地球博物館)

【短報】晩秋～初冬におけるフタイロミゾキノコシバンムシの西丹沢からの記録

シバンムシ科フタイロミゾキノコシバンムシ *Mizodorcatoma pulcherrima* Sakai は本州・四国・九州・対馬に分布する美しい種である。一般にまれな種とされており、神奈川県ではこれまで横浜市金沢区(久保・渡, 1998)と藤沢市(堀井, 2007)から知られている(記録上の分布東限と思われる)。前者では6月に横浜市円海山地域で1頭が採集され、後者では3月にサルノコシカケ状の菌類中にいた多数の幼虫が4月下旬から5月上旬に羽化脱出したという。筆者らの一人、木村は晩秋～冬期に西丹沢においてサルノコシカケ類のマンネンタケ科マンネンタケ属に属するオオミノコフキタケの下面よりいくつかを見出したので報告する。

3頭採集(神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵)ほか数頭目撃, 神奈川県足柄上郡山北町玄倉丹沢湖ビジターセンター(標高約340 m), 30. XI. 2011, 木村洋子; 1頭目撃(図1), 同, 15. XII. 2011, 木村洋子。

このオオミノコフキタケ(図2)は林縁に生育するアカシデ(カバノキ科)生木の幹に付着していた(図3)。

本種の寄主菌類としては、これまでオオミノコフキタケと同属のコフキサルノコシカケが知られており、長崎県で3月に持ち帰ったものから5月下旬に多数が脱出した(和田ほか, 2001)。また、Sakai (1979)も本種の原記載のタイプシリーズに、鹿児島県における7月下旬の野外採集個体とともに

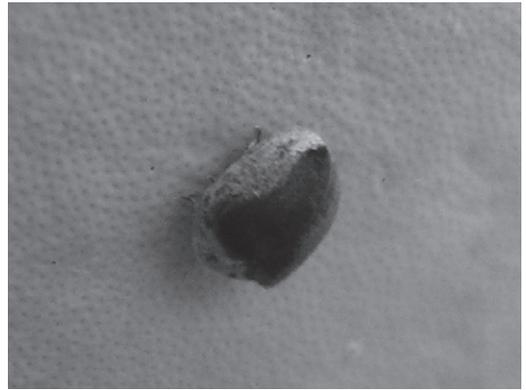


図1. オオミノコフキタケ下面にいたフタイロミゾキノコシバンムシ。



図2. フタイロミゾキノコシバンムシが発見されたオオミノコフキタケ。



図3. オオミノコフキタケの生育状態。

に、愛媛県(3月)と対馬(5月)から採集したサルノコシカケ類からともに6月に脱出した多数の個体を含めている。今回の西丹沢における知見と堀井(2007)、和田ほか(2001)、Sakai(1979)を考慮すれば、本種はサルノコシカケ類(とくにマンネンタケ科マンネンタケ属 *Ganoderma*)を寄主菌類とする狭食性種と言えよう。さらに和田ほか